

## 山城高校、私の二十年

旧職員 渡辺信平

昭和三十七年から二十年間、山城高校に勤務した。その間、私が経験した最も大きな事件は昭和四十年代の学園紛争と昭和五十年代の校内埋蔵文化財の出現である。この二つについて字数制限以内で述べてみる。

### 一、学園紛争

戦後民主主義教育の功罪は戦後六十年の現在、教科書問題などで大きく取り上げられている。四十年前の学園紛争も、戦後民主主義教育の歪みの中で、旋風のように全国的に起こった。終戦後、旧制の学校教育を受けた教員の多くは民主主義の訓練を得ないまま、試行錯誤的に新制の学校で教育に従事した。しかし、教員に民主主義教育の洗脳をしたのは主として教職員組合であった。教育三原則（小学区制、総合制、男女共学制）はほぼ、全国で行われたが、やがて、実情に合わせて改訂され、京都府は最後までこの制度が残った。教職員組合の活動は政治

色をおびるようになり、教育現場の学校では、摩擦や矛盾も出て来た。山城高校では組合は分裂し、私が赴任した昭和三十七年には二つの組合が対立していた。対立が表面化することは余り無かったが、組合の主張する教育三原則は守られており、その矛盾点が表れてきていた。小学区通学制度のため毎年通学区が変わり、中学の同級生や兄弟が自分の意思に関係なく、別的高校に行かせられたり、普通科、商業科が授業とは別にホームルームが作られたり、学力が進学向きでなかったためか、大学進学率が落ちたりした。

一方で私立高校が進学に力をいれ、進学面で公立、私立の差が目立ち始めていた。このような流れの中で、昭和四十年に入り、突発的に大学紛争が起こり、全国に蔓延して、高校までも紛争が起こった。紛争の原因は学校により、様々だが、蓄積した不満が爆発したもので、戦後の体制が見直されたりした。山城高校でも修学旅行の騒ぎで始まり、授業中爆竹を投げ込んだり、ボイコットをしたり、騒然とした中で、ハンガーストライキをするグループもでてきた。ハンストの目標ははっきりしなかったが、河原校長をはじめ教職員は一致して沈静化に勤めた。一年くらいで収まったが、教員の生徒を見る眼差しは変わり、後遺症は残り、教員の自信喪失は暫く続いた。その後、昭和五十年代に入り、高校生の急増の時期を迎える時、教育三原

則を見直すことになった。

## 二、埋蔵文化財の出現

昭和四十六年、学園紛争の余波は漸く収まりかけた頃、聴覚障害者を普通高校に入れる運動の波に乗り、山城高校で受け入れられることになった。そのための施設設備が必要となり、合わせて老朽化した校舎を増改築することになった。昭和五十四年工事の途中で学校の中心部で大型の埋蔵文化財が見つかり、工事を中断して発掘作業が始まった。平安時代の貴族庭園ということで、新聞、テレビが大きく取り上げた。大騒ぎとなり、学者やマスコミ、一般見学者が押し寄せた。学者の中には学校を移転して遺跡を永久保存すべきと言う者まで表れた。私は教頭であつたが、夏休みは殺到する見学者の監視に一日も休めなかつた。文化財のため当初の建築計画の変更を余儀なくされた。吉谷源太郎校長は大いに怒り、文化財が大切な教育が大切な、学者が大切な生徒が大切な、京都府教育委員会や、府議会などと交渉を続けた。結局、貴族庭園の池と推測される部分を中庭にテニスコートとして残すことで大部分の工事は完了した。三十年後、山城高校は再び改築され、吉谷校長が奮闘された往年の面影は今は少なくなった。